

私の工夫

ICT機器を活用した授業
「ねらいを明確に、「自立」と
「社会参加」に目を向けて」

県立岡山東支援学校 小学部

教諭 平井 康智



1 はじめに

パソコンやiPad等、さまざまなICT機器を授業で活用することで、児童の興味を引き付けたり、活動への理解を促したりすることができ、それらを授業に取り入れる有効性を日々感じている。児童にとっても魅力的で、現在多くの授業で取り入れられているICT機器であるが、なぜ使うのか、どのように使うのかを明確にしておく必要がある。本稿では、微力ながら、私が取り組んでいる実践や心掛けていることについて紹介したい。

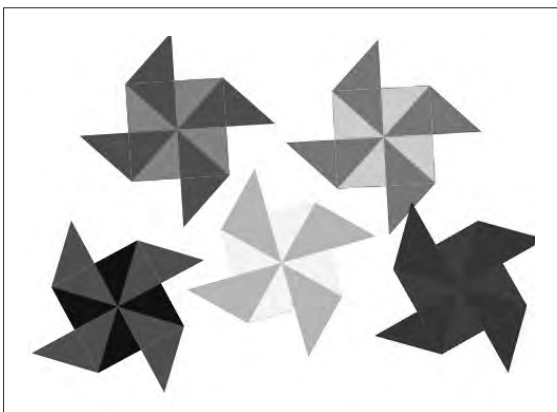
2 私のこだわりポイント

(1) 機器の環境設定

話し言葉だけでは理解が難しく、集中が途切れやすい児童も、テレビ画面やiPadの画面等には注目できることがある。これはICT機器を使用する一つのメリットであるが、使い方を誤ると、注意が逸れたり、それらに依存してしまったりする恐れがある。そのため、ICT機器を使用しないときには、ホワイトボードや布等で隠して視界に入らないようにしたり、コード類を児童の動線の妨げにならないような長さで繋いだりして、注目してほしい物に目が向くような環境設定を心掛けている。

(2) 細かいアニメーション

児童の興味を引き付けられるように、パワーポイントを使う際にはアニメーションを工夫している。風を題材にした学習の際、図形を組み合わせてかざぐるまを作り、回転するアニメーションを付けた。児童が画面に向かって「ふーっ！」と息を吹きかけるのに合わせて、かざぐるまを回転させることで、どの児童も本時の活動へ興味や期待感をもつことができた。イラストや写真を提示するだけでなく、アニメーションを工夫して



かざぐるまが回転するアニメーションのイラスト



画面に向かって息を吹きかける児童

アルな動きを加えることで、児童が活動へのイメージを膨らませたり、意欲を高めたりすることができると感じた。

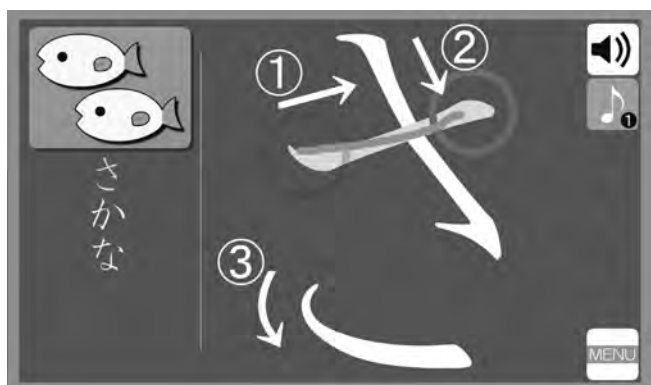
(3) デジタルとアナログの併用

活動内容の説明とともに、手順やポイントなどをテレビ画面に提示することがある。そのとき、分かりやすく説明しようとする、画面上に提示することのできる情報は大概一つになる。そのため、三つのポイントを提示しようとする、三つ目のポイントについて

話すときには、一つ目と二つ目のポイントが画面から消えているため、情報が断片的になってしまう。そこで、興味を引き付けることのできるデジタル教材（パワーポイントによる視覚支援）と、消えずに残るアナログ教材（黒板に貼る紙媒体のイラスト）を併用するようになっている。ポイントの説明が終わるたびに、同じ内容を印刷した物を黒板に貼り、情報を残していく。こうすることで、すべて説明をし終えたときには、黒板に三つのポイントすべてが残っており、情報が断片的になることを防ぐことができる。

3 心掛けてほしいこと

ICT機器を使用する際、「ねらいを明確にすること」「子どもたちの『自立』と『社会参加』に目向けること」を心掛けている。それらを使用することが目的ではなく、達成したいねらいへ迫る



アプリ「にほんご一ひらがな」のなぞり書きの問題番号と丸で書き順等が視覚的に示される。

ための手段の一つであると考えられる。例えば、「文字のなぞり書きができる」ことを目標にしている児童に対し、私は「にほんご一ひらがな」というなぞり書きができるアプリを使った課題を設定した。始めはプリント課題に取り組んでいたが、どのように書けば良いのか児童にとっては分かりづらく、定着が図りにくかった。そこでアプリを導入すると、書き順を目でとらえることができ、徐々になぞり

書きができるようになった。その児童にとっては、紙媒体での学習よりもアプリを使った学習の方がよりねらいへ迫りやすかったと見える。

また、児童がICT機器を生活や学習の中で活用していくためには、それらの機器が特別なものでも、おもちゃでもなく、学習や生活をjする上で適切に扱うことができるツールとなる必要がある。その例として、発語のない児童が朝の会を進行できるように、iPadの「DropTalk」を使用した。

「挨拶」「天気」等、各項目を示すイラストをタップすると、「天気。〇〇さん、お願いします」等と録音した音声が出力される。これにより、今までコミュニケーションの受け手になりがちだった児童が、自ら他者へ働き掛ける機会を設定することができた。児童自らがさまざまな場面でICT機器を活用しながら集団や授業に参加できることが、将来の「自立」と



「DropTalk」で朝の会の司会をする様子

「社会参加」に繋がる一助となると考える。

4 おわりに

国や県で進められているICT機器活用のための環境整備の中で、それらをなぜ使うのか、どのように使うのかを明確にし、今後も研鑽を積んでいきたい。